

キリスト教学校における大学設立問題とキャンパス計画

—大正期における青山学院を中心にして—

鈴木勇一郎

はじめに

キリスト教学校には戦前以来の多くの建物が残されているが、それらはキャンパスのランドマークとなるなど、その学校の特徴を形作っている。

これらの建物やキャンパスについては、それぞれの学校が年史の中で触れたりしているが、本格的な研究は主に建築史の分野で進んできた。例えば二〇世紀の前半に全国のプロテスタント系キリスト教学校四三校もの建物設計を手がけたヴォーリズについては、山形政昭がミッションスクールの建築の変遷の中で検討している^①。それらの研究では、主に建築様式の分析を主眼に据えてきた。もちろん、建築史という立場からすれば当然といえ

るが、それらが当時のキリスト教学校の中でどのような意義を持っていたのかについてはあまり関心を払われていない。

しかし、こうしたキャンパスが出現してきた背景には、当時のキリスト教学校が置かれていた状況やそれぞれの学校が持っていた教育や経営の構想があつたはずである。キリスト教学校の多くは、外国キリスト教派が日本で宣教を進めるという「ミッショն」を帶びて設立した「ミッション・スクール」であった^②。外国ミッションとの關係が薄れ、普通教育機関化が進んだ戦後とは異なり、戦前においては、外国ミッションと各学校との経営の間に密接な関係があった。本稿では、戦前におけるキリスト教学校のキャンパス整備を、外国ミッションとの関係

および大学設立計画といった当時これらの学校が直面していた問題との関係の中で検討することが課題である。創立当初は、中等教育を中心とする小規模な学校が多かったキリスト教学校も、二〇世紀に入り、高等教育に対する需要が大きくなつてくると、専門学校としての認可を受けるなど、高等教育機関としての志向を強めていった。しかし、専門学校は、大学とは名称だけにとどまらず、さまざまな面で格差があり、大学への昇格をめざすようになつていつた。⁽⁴⁾

このような大学設立をめざす動きは、キリスト教学校だけが進めたわけではなく、法律系や仏教系の各学校においても一九一八年の大学令制定前後を中心に盛んになつていった。しかしこの時期のキリスト教学校が他の私立学校と比べて特徴的であったのが、大学設立構想とキャンパス整備問題が密接に結びつく傾向が強いことであつた。もちろん、このことは他の学校が設備投資や校舎の整備に消極的であったということを意味しないが、この時期のキリスト教学校は、キリスト教的な教育構想の実現と総合的なキャンパス計画が結びつき、法律系などを以外の学校と比較すると、相対的にキャンパス整備問題がより重要性を持つていたことは指摘しておきたい。

この問題については、本来さまざまなキリスト教学校の動きを比較しながら検討していく必要があるが、史料

などの制約から、全面的に議論を展開するのは今後の課題とせざるを得ない。そこで本稿では、キャンパス計画と大学設立構想をはじめとする教育構想との関係性が明確に連動する形で展開した大正期の青山学院を中心に、その前後の時期の立教院のキャンパス計画の展開と比較しつつ検討し、今後の議論の出発点にしようとするものである。

1、キリスト教学校におけるキャンパス整備 問題と建築家の選定

日本においては、明治初期から外国の宣教ミッションによつて多くのキリスト教学校が設立されてきた。学校自体の性格が安定していなかつたその初期には、個々の建物を必要に応じて建設するといつことが一般的であり、その設計についても正規の建築家ではなく、宣教師などの指導のもと地元の大工などが担当することが多かつたとされる⁽⁵⁾。

二〇世紀にはいると、各キリスト教学校では高等教育部門を拡充し、大学設立をめざすようになった。キリスト教学校では、それぞれの学校が単独で大学をめざすではなく、各校が共同してキリスト教大学の設立をめざす運動が展開された。これは、当時各教派が共同で事業

に当たるエキュメニカル運動が盛んになりつつあったことを背景として、帝国大学にも対抗し得るような本格的な大学の設立を念頭に置いていた。主要なキリスト教学校はその協議に参加したが、各学校や教派の思惑から、それぞれ異なる姿勢を示すようになつていった⁽⁵⁾。

青山学院は、一九〇四年に専門学校として認可を受け、一九〇六年には青山学院財團法人を設立するなど、二〇世紀最初の一〇年を通じて経営及び教育体系が一通り安定を見るようになった。こうした状況を背景として大学設立を模索するようになつたのである。

青山学院の前身校が築地から青山へ移転したのが一八八三年であるが、これ以降徐々に校舎が整備されていったので、その初期には統一的なキャンパスのプランがあつたわけではない。

しかし、その後における教育課程の整備に対応して、一九〇六年には新ガウチャーホールと呼ばれるようになる普通教育用の校舎、翌一九〇七年には弘道館と呼ばれる講堂がそれぞれ完成するなど、次第にその姿を整えていった。この二つの建物はともに立教学校の校長も務めた在日アメリカ人建築家ガーディナー（James McDonald Gardiner）の設計によるものであった。後述するように、この時期には築地の立教学院もガーディナー設計の校舎を使用するなど、当時東京のキリスト教

学校では、彼の手による校舎が数多く建てられていたのである。

立教学院でも、このころ本格的な高等教育への志向を強め、一九〇七年には専門学校令に基づく立教大学の設置認可を受けていた。しかし、「大学」とは名乗ったものの、その実態は名称とは程遠いものであった。立教は、一九一〇年にエジンバラで開催された世界宣教大会以降具体化してきた、日本における超教派のキリスト教大学設立構想に対しても、当初から積極的な姿勢を示さなかつたが、次第に立教独自で大学設立をめざす意志を明確に示すようになつていった⁽⁶⁾。

これに対して、青山学院は当初、キリスト教大学構想に積極的な姿勢を示していた。一九一〇年の世界宣教大会には、明治学院総理の井深梶之助とともに、前青山学院院長であった本多庸一が出席し、日本におけるキリスト教大学設立の必要性を訴えていた⁽⁷⁾。その後、各キリスト教学校が集まって、その具体的な推進を協議する会議を青山学院などでたびたび開催していた⁽⁸⁾。

こうした状況の中、一九一三年三月、青山学院院長に就任したのが高木壬太郎であった。『基督教大辞典』⁽⁹⁾を編纂するなど、神学研究者としても知られた高木は就任後、さまざまに積極的な施策を矢継ぎ早に打ち出していくた。

一つは「基督教主義」の提唱である。ここで高木は、青山学院における教育が必ずしも在校生のキリスト教への入信を目的とせず、その素養に基づいた教育を実施することを明言している。つまり、明治初期に学校を設立した当初の目的であった、教育を通じての宣教とは異なる一般的な教育への傾斜を明確化したのである。

こうした高木の院長としての積極的な姿勢は、具体的な学校整備の面でも顕著なものであったが、その中でも大学設立はその中心的な課題となるものであった。

先にも触れたように、この時期、明治学院、立教学院などとの間で、キリスト教大学設立をめざした協議が続けられていた。当初から消極的な姿勢を示していた立教学院とは異なり、青山学院は、この動きに積極的にコミットしていたが、議論を進める中で、各校の思惑の違いが明らかとなり、同学院もキリスト教大学設立運動から次第に距離を置くようになつていった¹⁰。

高木は、キリスト教大学が当面実現しない場合には「私共は自ら進んで青山学院大学を作り上げる迄に学院を発達せしめて、斯界に貢献する覚悟が必要である」として、他のキリスト教学校との連携ではなく、青山学院が独自に大学を設立することをめざすことを明確に打ち出した。また、中等教育や高等商業教育など、学校の規模も大幅に拡充する意向を示した¹¹。

ところが、こうした教育を本格的に展開し、大学を設立していくためには、大きな敷地と校舎など充実した設備が必要であった。先にふれた立教学院でも、このころ明治初期から拠点を据えていた築地では狭隘となり、広大な敷地を確保できる郊外への移転が目論まれた。そこで当時総理を務めていたタッカー（Henry St. George Tucker）のもとで、米国聖公会からの資金を得て、当時東京市外であった池袋に校地を取得した。キャンパスの具体的な検討は、タッカーに代わり新たに総理に就任したライフスナイダー（Charles Shriner Reifsneider）のもとで進められた¹²。

立教では、築地時代から校舎の設計は、ほぼ一貫してガーディナーが担当してきた。築地校舎とその周辺は、六角塔校舎、寄宿舎、三一神学校や三一大聖堂など、彼の設計した建物によって埋め尽くされていたといつてよい。

ガーディナーは、米国聖公会の信徒宣教師として一八八〇年に来日し、立教学校の校長や立教大学教授を歴任するなど教育者として活躍する一方、数多くの教会や学校、住宅などの設計を建築家としても活躍した。しかし、彼は正式に建築学の課程を修めたわけではなく、ある意味ではアマチュアの建築家でもあった。一九〇三年以降、建築事務所を構えて独立して活動するようになつたが¹³、

その後も聖公会が建物を設計する際にはしばしばアドバイザーとして計画に携わっていたとされる。¹⁸⁾

必要に応じて建物を増築していくた築地とは異なり、池袋では、当初から統一的なキャンパスのプランが立てられた。詳しい経緯は不明ながら、当初ガーディナーがキャンパスの総合的な設計案を作成したもの、最終的に在米の設計事務所であるマーフィ＆ダナ建築事務所が担当することとなった。

ガーディナーのプランが採用されなかつた理由は現在のところ不明であり、今後の課題とせざるを得ないが、一九〇四年に伝道局を退いて聖公会との直接の関係がなくなつていたことや¹⁹⁾、大学で正式に建築学を修めてはいないアマチュアの建築家とみなされていた²⁰⁾ことも、あるいは影響していたのかもしぬれない。

築地時代の立教学院や青山学院など、日本のキリスト教学校の建築に実績を積んでいたガーディナーに対して、立教大学池袋キャンパスの全体プランを手がけることになつたマーフィ＆ダナ建築事務所は、日本での作例はほとんど確認できず、あまりその名が知られているとは言えない。

そうした彼らに設計を発注したのは、一見特異なことのように思える。実際、日本のキリスト教学校では、ガーディナーやヴォーリズといったミッションに関わりのあ

る在日の外国人建築家を起用することが多かつたからだ。確かにマーフィーにしてもダナにしても日本では知られていないかたが、ダナ (Richard Henry Dana Jr.) は、ハーバードやコロンビア大学で建築を学んだ後、フランスのエコール・ド・ボザールに留学したという経歴を持ち、主にアメリカ東海岸で活動を展開していた建築家であり²¹⁾、マーフィー (Henry K. Murphy) は燕京大学をはじめ、中国では数多くの作品を残し、のちに国民政府の建築顧問を務めるなど²²⁾、国際的な観点からみるとメジャーナ建築家であった。

立教学院は、米国聖公会のミッションが直接經營するという時期が長く続き²³⁾、先にも触れたように、池袋キャンパスの建設も米国聖公会の援助によって建設された。外国ミッションが建築事業を主導していたとすれば、アメリカやアジアなどで実績を積みつつあったマーフィ＆ダナ建築事務所への依頼は、決して不自然なことではなかつたし、それ自体がこの時期の立教学院の性格をよく表していると見ることもできよう。

マーフィ＆ダナ建築事務所の設計による池袋キャンパスは、一九一八（大正七）年九月に完成した。立教ではこうした基礎をもとに、一九二二年五月に大学令に基づつまり、立教学院においては、米国聖公会が資金面で

全面的にバッカアップする形で、大学設立事業が進行し、それに伴う池袋移転と新キャンパスの建設が進行したといえる。その際、建築家の選定も米国聖公会の主導のもとで行われたのである。

これに対して、青山学院では対照的な形で事態が進んでいった。同学院では、高木院長が主導した大学設立を

含む大規模な学校整備計画を「青山学院拡張計画」案と名付けたが、その際に重視されたのが、やはり充実した教育を行うための本格的なキャンパスの計画であった。

一九一三年一二月五日に開催された特別理事会で「青山学院拡張計画」推進の方向性が承認された際⁽⁵⁾、キャンパスについても「永久的の計画を立て、将来建築すべき建物は凡そ此計画に準拠」させることを決議している⁽⁶⁾。

高木院長のもとで一九一六年二月には、高等学部に文科、英語師範科、及び実業科の三科を置き、それぞれ予科一年本科三年とした。さらに高等学部の中でも人文科と実業科に分け、人文科は欧米諸大学のリベラル・アーツに倣って人文的教育を主眼とするようになり、実業科はほぼ当時の高等商業学校に準ずるものとなつた⁽⁷⁾。

こうして学校の規模が拡大していくと、キャンパスの拡充は焦眉の急となつた。当時の青山学院では、神学教育以外の一般の教育は、高等学部も中学部も基本的に一九〇六年に竣工したガーディナー設計の新ガウチャーホールに同居して行っており、増加し続ける学校の課程および学生・生徒の数に対応できなくなりつつあった⁽⁸⁾。

このような状況の中、青山学院では、ヴォーリズ事務所に抜本的なキャンパス計画の作成を依頼していた。一九〇八年に滋賀県立商業学校の英語教員として来日したヴォーリズ（William Merrel Vories）は、同校解職後の一九一〇年に設計事務所であるヴォーリズ合名会社を

自に資金調達して拡張事業を推進していく姿勢を明確にしていた。このような日本人校友からの資金調達と經營に対する発言力強化の動きは、一九二二年、青山学院財団法人理事会にそれまでの日米メソジスト教会員に加えて校友会からも理事を選出するという寄付行為の変更⁽⁹⁾につながっていくことになった。

設立し建築に携わるようになった。その後、全国各地で四三校に及ぶプロテス탄트系キリスト教学校でキャンパスの建築を手がけ、「ミッショն・アー・キテクトの霸王」とも称されるようになつた。⁶⁰ しかし彼も大学で正規の建築学を修めたわけではなく、その意味ではガーディナーと同様にアマチュアの建築家であった。

正確な時期は不明だが、このころにヴォーリズ事務所が作成した青山キャンパスの全体プランの鳥瞰図が残されている（図1）。そこでは講堂（Chapel）を中心に神学部をはじめとする校舎、図書館、寄宿舎、外国人住宅などが周辺に向けて配置されるなど、統一的な計画がなされていた。このヴォーリズプランが、青山学院においてどの程度まで正式なものとして扱われていたのかは、現段階で正確にはわかっていない。しかし一九一六年五月十七日発行の『青山学報』では、ヴォーリズプランとほぼ同じ配置図が「青山学院将来計画図」として紹介されており⁶¹、この当時には学内でヴォーリズプランの採用が公式のものとみなされていたことがわかる。

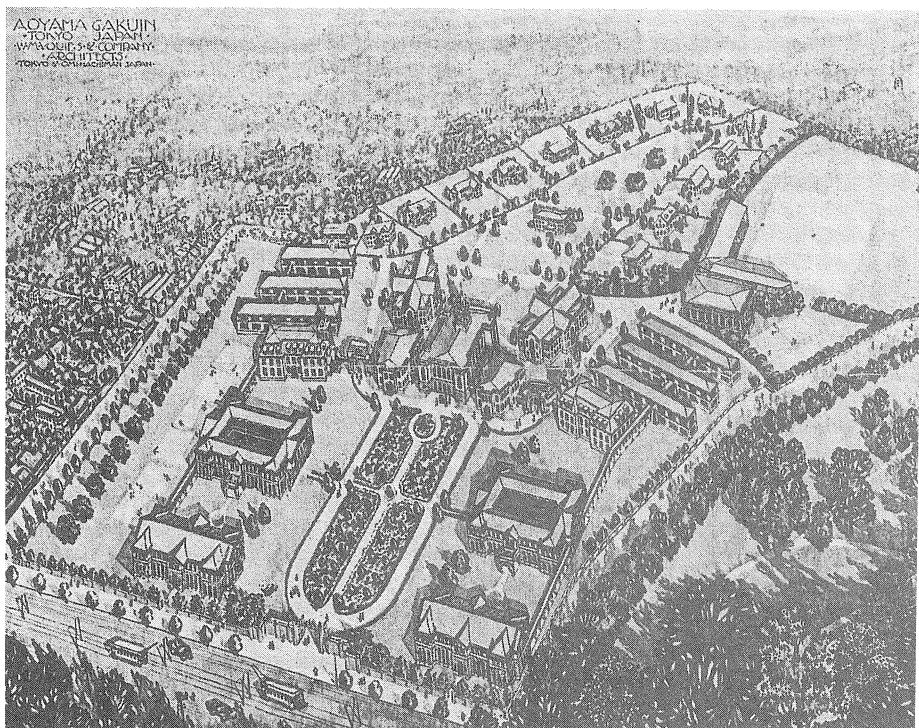


図1 ヴォーリズ事務所作成のキャンパス計画図〔青山学院資料センター所蔵〕(AA073:20)

ヴォーリズ事務所で、実際に青山学院のキャンパス計画作成に当たったのは、ヴォーゲル (J.H.Vogel) であった。彼の手によって校舎や寮などの具体的な建築計画が立てられたが、そこでは「近代的なキリスト教社会形式 (modern Christian social type)」の実現をめざすなど、ヴォーリズ事務所による統一的なキャンパス計画はキリスト教教育のあり方と大きな関わりを持っていた。

2、「勝田館」の建設と辰野金吾

「青山学院拡張計画」が理事会で承認された後、高木院長は北海道から九州までを巡歴し、校友に積極的に寄付を呼び掛けていた^④。こうした呼びかけに応えたのが、校友の一人である勝田銀次郎であった。

勝田銀次郎は、青山学院の前身である東京英和学校で学んだのち、海運業界で頭角を現し、勝田汽船という船会社を経営していた。第一世界大戦期の好況によつて巨万の富を得ていた。なお勝田はのちに神戸市會議長、神戸市長などを歴任している^⑤。

勝田は校舎建設資金寄付の申し出に応じて、一九一六年七月、理事会は高等学部校舎の建設を決定した（以下「勝田館」と称する）^⑥。その際建物の設計は、勝田の強い意向を受けて辰野金吾の設計事務所である辰野片岡建

築事務所に依頼することも、あわせて決められている^⑦。彼がなぜ辰野を指名したのかは不明であるが、勝田は同時期に彼が経営していた勝田汽船本社の設計も辰野に依頼するなど、両者の間には関係があった^⑧。

辰野は、東京駅の設計者として現在知られているが、一九〇二年までは帝国大学工科大学建築学科の教授を務めるなど、明治期の日本における代表的な建築家であった。東大を退官し、片岡安と共同で建築事務所を開業してからの辰野は、企業や銀行、駅舎などさまざまな分野の建築の設計を手がけている。その中には学校やキリスト教会も含まれているが、管見のかぎりキリスト教学校の設計を手がけたのは、この勝田館のみである^⑨。

日本におけるキリスト教学校の設計は、おおむね来日した外国人建築家が手がけることが一般的であった。初期には留地在住者であつたり、ガーディナーのようなミッションの一員であつたりとさまざまであつたが、大正・昭和期にはヴォーリズのように全国各地のキリスト教学校の建築を大量に手がける建築家も現れるようになつた。

これに対して、戦前までのキリスト教学校の設計を辰野のような日本人の正統的な建築家が手がける例はほとんどなく、勝田館の他には同志社女学校の武田五一などを、例外的に確認できるのみである^⑩。

つまり戦前の日本のキリスト教学校の設計は外国人が担当することが一般的であり、青山学院というキリスト教学校の校舎の設計を辰野金吾が手がけたということとは、きわめて特異なことであった。

これが偶然であったのか、意図的なものであったのかは、現段階では即断できないが、少なくとも当時の青山学院では校舎建築に辰野が携わるようになつたことが、多くの波紋を投げかけることになった。

青山学院神学部長であったベリー（Arthur Daniel Berry）は、当時帰米中であつたが、七月の末に勝田からの寄付を知らされると、直ちにメソジスト監督教会海外伝道局のノース（Frank Mason North）に書簡を送り、非常な喜びの心情を伝えている。¹⁰

だが、やがて建物の設計を辰野金吾に依頼するということが明らかになつてみると、それまで進めてきたウォーリズプランから辰野主導の設計に転換することに対し、強い懸念を示すようになった。一〇月七日にベリーは高木院長に書簡を送り、それまでウォーリズ事務所でキャンパス計画作成に当たってきたヴァーゲルの建築家としての優秀性を強調することで、彼のたてたプランの維持を主張した¹¹。

メンジスト監督教会の牧師であったガウチャー（John Franklin Goucher）は、創立以来青山学院に対して校

地や校舎などさまざまな寄付を行つてきた人物であった。彼もまたこうした建築家のウォーリズから辰野への変更の動きを知ると一〇月一九日に書簡を送り、急激な計画の変更は望ましくないとして、強い態度で高木を牽制した¹²。

さうに一四日には、メソジスト監督教会海外伝道局のノースもこの問題についてベリーと協議し、新たな建物が建設されること自体は歓迎しつつも、これまでのキャンパスの建物との調和を欠くようなプランはのぞましくないという趣旨の書簡を高木宛に送つた¹³。

しかし、青山学院が勝田からの大規模な寄付という形で独自に資金を調達したのに対し、メソジストから大規模な資金援助ができない以上、そのまま建設計画が進行するのは避けられないことであった。こうして詳細な経緯は不明であるが、ウォーリズプランは事实上放棄され、代わって辰野による設計が進められることになった。辰野が設計を手がけた勝田館は一九一七年一月に建設工事を始め、一九一八年十一月十六日に落成式を行つた。

東京英和学校時代以来青山学院では、中学部と高等学部が、同じ校舎の中に同居していたが、この勝田館の完成によつて高等学部専用の校舎ができ、はじめて高等教育と中等教育の場が空間的に明確に分離されることとなつた。

こうした実績をもとに、高木は一九二〇年一二月一三日、臨時理事会で文学部と商学部の二学部からなる青山学院大学設立計画案⁽⁴⁾を提出し、その承認を受けた⁽⁵⁾。ここでは、一九二二年春からの大学昇格を予定していたが、これは当時進行していた関西学院の大学設立予定年次を、強く意識したものだった⁽⁶⁾。ところがその直後の一九二一年一月、高木は病死した。こうして彼のもとで推進してきた「青山学院拡張計画」は停滞を余儀なくされるようになつた。さらに一九二三年九月一日には、関東大震災が発生し、青山学院の建物も大きな被害を受けることになった。

3、キャンパスの「リアレンジメント」と レーモンド

関東大震災で大きな被害を受けた青山学院では、高木のあとを受けて院長に就任した石坂正信が、資金援助の要請のため急遽訪米する一方⁽⁷⁾、復興のための計画を立て始めた。そこでは、震災前に具体化していた大学計画をいったん棚上げとし、とりあえず専門学校としての復旧を急ぐことや、女子系の青山女学院と経営統合して再建を図るべきだという構想が具体化した⁽⁸⁾。また、当時の青山学院の首脳陣は、すでに青山の土地の価値が大き

く増してきているとして、郊外への移転を否定し、現在の位置⁽⁹⁾で再建を図ることを明らかにしていた⁽¹⁰⁾。

一九二三年九月二六日にベリーは、ニューヨークにあるメソジスト監督教会海外伝道局のノースに書簡を送り、次のように述べている。ここでベリーは青山女学院との合併を推進するべきとの立場を示した上で、かつて青山学院の有力者はその影響力を行使して、青山女学院を他の場所に移転させることを目論んだが、今回の地震のおかげ “thanks to the earthquake” で、より有効に建物を再配置 “re-arrangement” することが可能になつたと記している⁽¹¹⁾。こうした状況の中、震災の翌月の一〇月六日に開催された常任理事会は、建築の将来計画作りを建築家アントニン・レーモンド (Antonin Raymond) に依頼することを決定した⁽¹²⁾。実は一九一八年に完成した勝田館は、震災で全壊したわけではなかつたようだが、かなりの被害を受けたため、その状況の調査をすでにレーモンドの事務所に依頼していた。その過程で、復興の全体計画の作成もレーモンドに依頼することが決められていたのである。

日本人が主導権をとりつつあつた震災前とは異なり、米国側による大規模な援助で復興をはかるうとしていたこの時に、かつてプラン作成を依頼したヴォーリズ事務所ではなく、なぜレーモンドがここで新たに登場したの

かは、現在のところよくわからない。しかし、ベリーが米国に送った報告の中で、レーモンドについて日本におけるこの種の事業を任せるには最適任者と高く評価していることは、この選定がベリーを中心とする外国人宣教師による主導で行われたことを示唆している。

レーモンドによる復興プラン作成は、すでに男子系の青山学院と女子系の青山女学院の合併が具体的に進行し始めていたことから、両学院を合わせた全体的なものとなつた。またこの書簡の中では、震災後も青山学院は、別の土地に移らず、現在の場所で維持し続けることが望ましいという意見をベリーが述べている。

一九一四年六月一九日付で、レーモンドの事務所である American Architectural & Engineering Company が高等学部の設計原案の青図を⁶³、さらに引き続いで中学部校舎の図面を作成するなど、具体的な建築設計が進んでいった。

レーモンドの事務所に設計を依頼してから約一年後の一九一四年一一月、「青山学院新築校舎敷地設計図」が『青山学報』上に発表された（図2）。正門からのメインストリートに沿って両側に校舎を配置し、奥のロータリーの正面に図書館を配するという、その後の青山キャンパスの基本的な配置がここで示されている。また、校舎は

基本的に英國風のチューダー様式で統一するとも明らかにされている⁶⁴。

一方青山女学院では、男子系の復興資金とは別に、設立母体である W.F.M.S (メソジスト監督教会婦人海外伝道会社) から独自の復興資金を調達していたが⁶⁵、先にも触れたように青山学院との合併を前提に、レーモンドが両学院を合わせた総合的なプランを作成していた。

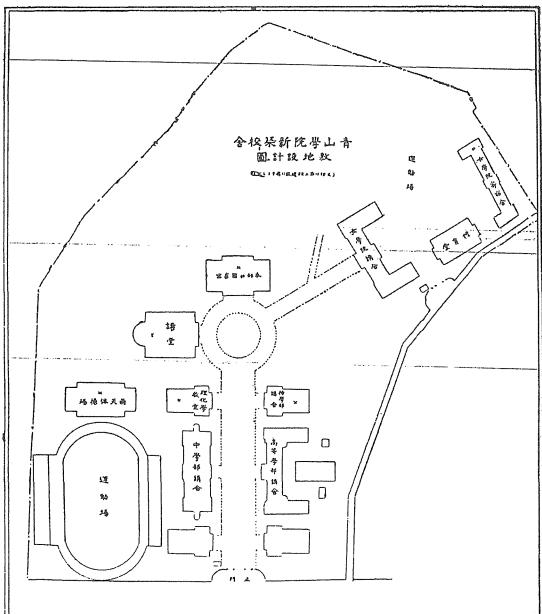


図2 レーモンド事務所作成のキャンパス配置図
（『青山学報』28号 1924年11月15日）

こうした震災復興事業の最初の建物として一九二五年に竣工したのが青山女学院校舎であった。レーモンドの関与が確認されている中学部などの青山学院の校舎とは異なり、青山女学院の校舎の設計を当初誰が手がけたのかは史料的には確認できていない。

しかし、青山女学院を含めた全体計画がレーモンドの手によっていること、中学部の設計原案に描かれた外観の様式が実際に建設された中学部の校舎よりも、より青山女学院の校舎に酷似していること（図3）、復興事業完成当初の写真などからは、当初は青山キャンパスの景観の主要構成要素であったことが明確なことなどを考慮すると、女学院の建物もレーモンドの手によって設計された可能性は高い。

一九二五年三月二十四日、「青山学院校舎建築委員会」が開催され、レーモンドの原案を基に、事業を進めることを確認しているが、同時に予算などの都合で、原案を改変することもありえるということも決まっている⁶⁰。

一九二六年四月に高等学部、中学部校舎および大講堂が完成した。一一月に行なわれた

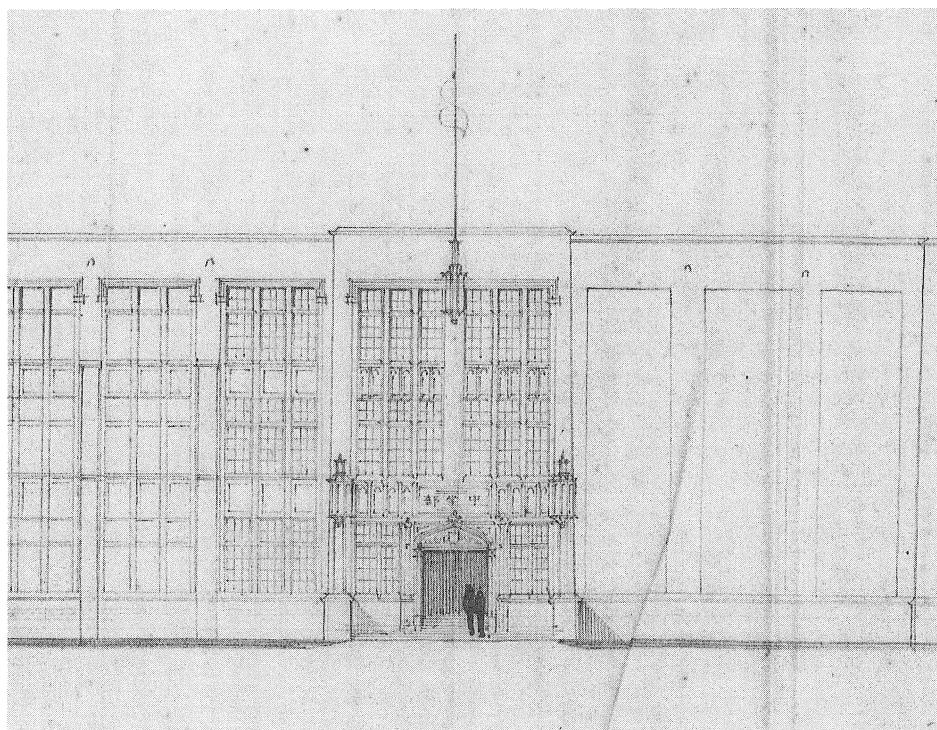


図3 レーモンド事務所作成の中学校部校舎の外観 [青山学院資料センター所蔵] (AA073:20)

完成式典に臨んだ石坂正信院長はその挨拶の中で次のように述べている。

「一言此所に申上げたき事は、此高中両校舎の設計はベリモンド氏の設計であります。が、清水組に於て之を訂正して一層丈夫なるものとし、外観を変更して作られたもの。」

「ベリモンド氏」とは、レーモンドのことを指すものと思われるが、レーモンド設計の原案をもとに清水組が最終設計を行ったということを指摘している。つまりこの時に至ってもレーモンドが原案を作成したという認識はあつたものと思われるが、清水組の手によってかなりの改変を加えられたことも間違いない。それがどの程度のものであり、その間にレーモンド側との間でどのようなやり取りがなされ、最終的に一九二六年の完成建物に落ち着いたのかは、今後さらに検討していく必要があるう。

この後、青山キャンパス内では間島記念図書館（一九二九年）、神学部（一九三一年）がレーモンド以外の人物の設計によって建設されていったが、これらの建物はレーモンドによる全体計画におおむね沿う形で配置されており、現在に至る青山キャンパスの景観の基礎は、レーモンドによる震災復興計画によって形作られたということができるだろう。

すでにレーモンドは、関東大震災以前に女子系の超教派キリスト教連合大学として構想された東京女子大学校のキャンパス計画の作成に当たっている。これはカール・ライシャワー（August Karl Reischauer）から依頼されて、レーモンドが総合計画と建築のデザインの作成に当たつたものだが、図書館を中心に左右に校舎を配し、背後に教職員住宅や学生寮という配置構成は、震災後の青山キャンパスの全体計画とも類似性を持つている。

このキャンパス構成は、第一次世界大戦まで、ライシャワーによって厳格に守られていたが、戦後は「学校の指導者が日本人となり、基本計画と関係なく、建物が敷地いっぱいに散らばってしまった」と、レーモンドはのちに嘆いている。もちろん彼がさまざまな問題を巧妙に解決したと自画自賛するキャンパス計画への評価は、あくまでも自分自身によるものであり、必ずしも客観的なものとは言えないが、少なくともレーモンドが全体的な構想の中での統一的なキャンパス計画を構想していたことを物語つていよう。

おわりに

本稿では、大正期の青山学院を中心にはキリスト教学校におけるキャンパス計画について検討してきた。

明治末期から盛んに構想されるようになったキリスト教学校における統一的なキャンパスは、当時具体化しつつあった大学設立計画と深く関わっていた。これらの事業には多額の資金を要するものであり、外国ミッションや日本人校友など学校運営の主導権を巡る動きにも密接に連動していた。

米国聖公会の主導のもと、キャンパス整備事業が推進された立教学院では、マーフィー & ダナという、日本ではなじみの薄い建築事務所によつてキャンパス計画が担われたのに対して、日本人校友による大規模な寄付があった青山学院では、それまで進められてきたヴォーリズ事務所による全体プランが実質的に放棄され、辰野金吾という非キリスト者の日本人建築家の手によつて、校舎の建築設計が担われることになつたのである。ミッションの主導権が強かつた立教では、その主導のもとで建築家の選定が進んだのに対して、ミッションの主導権が相対的に弱くなつて青山学院では、日本人の主導のもとで建築家の選定も行われたのである。つまり、キリスト教学校のキャンパス整備においても各ミッションとの関係の濃淡や力関係が強く作用していくことは明らかである。

しかし、学校経営の主導権と建築家の関係性は、日本人実業家の援助のもとで建設された関西学院上ヶ原キャ

ンパスが、ヴォーリズによつて設計が進められたように、ストレートに反映されるほど単純なものでなかつたこともまちがいない。しかしこれは、資金を提供した日本人実業家が、建築家の選定については口を挟まなかつたことに起因したものであり、立地については逆にその意向が強く発揮されたのである。

また、ミッションとの関係が強かつた立教学院や関西学院でとりわけ統一的なキャンパス計画が大きな課題となつていたのに対し、本稿では触ることはできなかつたが、相対的にミッションとの関係が薄かつた同志社や明治学院では、この問題の占める位置が低かつたということができる。本稿で中心的に検討した青山学院の場合、ミッションとの関係は立教學院と同志社の中間に位置づけることができるが、それだけにキャンパス計画を巡つてミッションと日本人学校関係者たちとの関係が明瞭に現れてきたのである。

しかし、本稿で見てきたような意味での各ミッションと学校との関係は、戦時体制期以降大きく変わっていくことになる。日米開戦により断然した各ミッションとの関係は、戦後復活するが、学校教育法の施行に代表される日本のキリスト教学校の普通教育機関化の進行と日本および各学校の経済的自立の中で、戦前とは異なつたフックターが学校の教育と経営の間に作用していくことにな

る。こうした中で各キリスト教学校のキャンパス整備も戦前から手がけてきたヴォーリズやレーモンドに加えて、日本人建築家の手になるものが増加していったのである。

今回は、青山学院以外は一次史料に基づいた実証的な研究を展開することができなかつたので、今後、立教学院や関西学院、さらには同志社や明治学院など他のキリスト教学校との比較研究を通じて、キャンパス計画と教育・経営システムとの関係性についてさらに検討していくたい。

註

- (1) 山形政昭「理想を形に—ミッショングスクールの建築」『ヴォーリズ建築の百年』(創元社 一〇〇八年)、同「関西学院キャンパスの建築(上)」「関西学院史紀要」一号一九九一年)、同「関西学院キャンパスの建築(下)」「関西学院史紀要」二号一九九二年)
- (2) 「ミッショングスクール」の定義については、北川直利『ミッショングスクールとは何か』(岩田書院 一〇〇〇年)、佐藤八寿子『ミッション・スクール』(中公新書 一〇〇六年)を参照。
- (3) 天野郁夫『大学の誕生 下』(中公新書 一〇〇九年)
- (4) 堀勇良『日本の美術四四七 外国人建築家の系譜』(至文堂 一〇〇三) 四三頁。
- (5) 大西晴樹「キリスト教大学設立運動と教育同盟」『キリスト教学校教育同盟百年史紀要』(創刊号 一〇〇三年)、小川智瑞恵「立教学院とエキュメニカル運動」『立教学院史研究』(第二号 一〇〇四年)
- (6) 「合同基督教大学設立計画之次第概要」(青山学院資料センター所蔵 AA025:42)。なお、以下 AA で始まる整理番号を付している史料はすべて同センター所蔵。
- (7) 久山康編『日本キリスト教教育史 思潮編』(キリスト教学校教育同盟 一九九三年) 二四七頁。
- (8) 前掲「合同基督教大学設立計画之次第概要」。
- (9) 高木千太郎『基督教大辞典』(警醒社書店 一九一一年)。
- (10) 前掲「合同基督教大学設立計画之次第概要」。
- (11) 高木千太郎「院長として希望する事ども」『青山学院校友会会報』一七号 一九一三年
- (12) 立教学院史資料センター編『立教学院の歴史』(立教学院 一〇〇七年) 七八、九頁。
- (13) その中で青山学院新ガウチャーホール(一九〇六年)、同弘道館(一九〇七年)など、他教派の学校の校舎設計も手がけるようになつていた。
- (14) 松波秀子「ジエームズ・マクドナルド・ガーディナーの人と作品」「築地居留地」第一号 一〇〇〇年
- (15) 松波秀子「James McDonald Gardiner の来日までの経緯 日本聖公会の建築史的研究 2」「学術講演梗概集 F 都市計画 建築経済・住宅問題建築歴史・意匠」(日本建築学会 一九九三年)
- (16) 青山学院のキャンパス計画(後述)立案の過程で、当時の神学部長ベリーが青山学院院長に送った書簡(注30参照)の中でも、ヴォーリズ事務所に勤めていた建築家ヴォーゲルに較べて、ガーディナーが「アマチュア」であることが指摘されているので、これは同時代的に認識されていた意識であつたものと思われる。
- (17) 立教学院近代建築調査委員会編『立教学院近代建築調査報告書』二

Tokyo' "Missionary files: Methodist Church, 1912-1949" Japan reel
105

- (18) Jeffrey W. Cody "Building in China: Henry K. Murphy's 'Adaptive Architecture,'" *The Chinese University Press*, 2001. なお、マーハーは中国風の様式で多くの建築を設計したりと知られていますが、当然正統的な西洋建築も多く手がけています。また、マーハーとダナは一九〇八年から共同で建築事務所を経営して、アメリカで活動していたのに対し、ガーディナー・やヴォーリズは建築家としてはアメリカでの活動実績がなかったことも大きな相違点である。
- (19) 一九〇七年の専門学校令による大学設立時には、米国聖公会日本伝道の責任者マキム、一九一二年の大学令による大学設立認可時には財團法人日本聖公会教学財團が設置主体であり、財團法人立教學院が設立されたのは、一九二一年になつてからのことであった。
- (20) 青山学院五十年史編纂委員会編『青山学院五十年史』(青山学院一九三三年) 一七頁。
- (21) 「理事会の土地家屋に関する決議」『青山学院校友会会報』一九号「一九一四年」。
- (22) 本文中でも触れていますが、「青山学院拡張計画」は、青山学院の米国メソジスト監督教会からの自立を強める傾向を持っていたが、一九三〇年代に入つて財團法人化し米国聖公会からの自立傾向を強め始めた立教學院が作成した将来構想も「立教學院拡張計画」を称したのは示唆的である。
- (23) 前掲『青山学院五十年史』一七頁。
- (24) 前掲「院長として希望する事ども」
- (25) 前掲『青山学院五十年史』三〇～三一頁。
- (26) 前掲『青山学院五十年史』一八頁。
- (27) "The immediate need of a college building at Aoyama Gakuin," 計画案『日本の美術44～外国人建築家の系譜』五五、五六頁。
- (28) 前掲『日本の美術44～外国人建築家の系譜』五五、五六頁。
- (29) 「青山学院将来計画図」『青山学報』一九一六年五月十七日。
- (30) Berry to Takegi Sep.13 1916 「拡張事業につきミッショナリ宣教師の書簡」(AA025-1-13) の書簡の中でもグリーはヴォーゲルの建築家としての能力を高く評価している。関東大震災後の一九三一年に青山学院神学部校舎を再建したが、この際学内の他の建物とは異なり、ヴォーゲルが設計を担当することになったのは、この建物がのちに「グリームホール」と称されるほど、グリーの主導のもとで建設されたことに関わっているものと思われる。
- (31) 前掲『青山学院五十年史』一七頁。
- (32) 勝田銀次郎の履歴については松田重夫『評伝 勝田銀次郎』(青山学院資料センター一九八〇年) を参照のこと。
- (33) 前掲『評伝 勝田銀次郎』三八頁。
- (34) "Minutes of the Executive Committee of the AOYAMA GAKUIN ZAIDAN 1903-1924" AA0223-1
- (35) 東日本旅客鉄道株式会社編『東京駅と辰野金吾：駅舎の成り立ちと東京駅のできるまで』(東日本旅客鉄道株式会社 一九九〇年) 一五頁
- (36) 前掲『東京駅と辰野金吾』一一一～一一五頁。なおキリスト教の教会は靈南坂教会堂を手がけています。
- (37) 日本建築学会編『新版 日本近代建築総覧』(技報堂出版 一九八三年)
- (38) ブリーの経歴については、青山学院校友会神学部会編『ブリー先生追悼文集』(青山学院校友会神学部会 一九六一年) 参照のこと。

- (39) Berry to North July 31, 1916 "Missionary files: Methodist Church, 1912-1949" Japan reel 105
- (40) Berry to Takagi Oct. 7, 1916 前掲『拡張事業は「やめました」へ』
教師の書簡】
- (41) Goucher to Takagi Oct. 19, 1916 前掲『拡張事業につき「やめました」へ』
宣教師の書簡】
- (42) North to Takagi Oct. 26, 1916 前掲『拡張事業は「やめました」へ』
宣教師の書簡】
- (43) "Plan for University development" "Missionary files: Methodist Church, 1912-1949" Japan reel 110 関西学院の大学設立計画は、米國の連合教育委員会の意向により、一九一三年に延期されるが、後述するように、この時期には結局大学設立を断念することになった。先にみたように、立教学院は一九一三年に大学令による大学設置を認可されたので、当初プロテスタント系キリスト教学校二校が、同じ時期の大学設立をめざしていたことになる。このことは一九二〇年の同志社大学認可が、他のキリスト教学校に与えた影響の大きさを物語つてじゃ。
- (44) 前掲『青山学院五十年史』一九頁。
- (45) Takagi to North Nov. 12, 1920 "Missionary files: Methodist Church, 1912-1949" Japan reel 110
- (46) 前掲『青山学院五十年史』一九頁。
- (47) 東京におけるメソジスト監督教会の学校として男子系の青山学院と女子系の青山女学院が、同一敷地内の別の学校として明治以来存在し続けていた。高木院長のもとでの「青山学院拡張計画」では、青山学院の拡充のため、敷地の一部を間借りしていた青山女学院は他に移転することになり、一九二一年以降代官山の新校舎で授業を始めるよ

うになってしまった（『青山女学院史』111111K-111111）。そのまま何事もなければ立教学院と立教女学院のようだ、その後も別の学校として存続し続けた可能性が高いが、関東大震災で両校が大きな被害を受けたことで急遽合併の方針が打ち出された。

(48) これに対して、教育構想と資金調達を結合し、郊外への移転を実行することの大規模なキャンパス整備と大学昇格を果たしたのが、関西学院であった（以下事実の経過については主に関西学院百年史/編纂事務委員会編『関西学院百年史 通史編一』（学校法人関西学院 一九七七年）に拠った）。

一八八九年に米国南マンシスル監督教会の宣教師ラババ（W.R. Lambuth）によって創立された関西学院は、創立以来神戸の市街地から離れた郊外に位置していた原田村にキャンパスを構え、校舎を整備していた。

一九一七年頃からは大学設立を具体的に模索するようになったが、当初は原田に次々と校舎を建設し、ここで継続して教育事業を行うことを前提として、本格的なキャンパス整備を推進していたのである。ところが、こうした動きに水を差したのが大学昇格計画の行き詰まりであった。南メソジスト監督教会とカナダメソジスト教会から構成される米国の連合教育委員会は一九一三年から大学を設立する」といってたんは承認したものの、その後財政上の理由から大学化の延期方針を決定した。外国からの援助が当面期待できないことが明らかとなつた。関西学院では、他の方法を模索せざるを得なくなつた。そこで浮上してきたのが郊外への移転であった。また大学設立のためには、さらに大規模な用地が必要とされていた。つまり、原田の校地を売却して郊外に移転し、大学昇格のための資金を捻り出しようというのである。

もちろんこの時期に郊外移転が浮上していった背景には、大学昇格問

題だけがあったわけではない。一八八〇年代に関西学院が創立された当初は、原田附近は神戸市街地から外れた郊外であったが、都市化が進行してきたこの時期にはすでに神戸市街地に取り込まれつつあった。そのため当初は閑静であった周辺も環境が悪化していた。さらに原田校地の敷地内が都市計画道路の予定地ともなっていた。こうしたいくつかの要因から郊外への移転が具體化し始めたのである。

キャンパスが開設された一八八〇年代には、市街地から外れた郊外であったのに、その後の都市化の進展で、市街地の中に取り込まれていただという点で、一九二〇年代に神戸の原田と東京の青山の置かれていた位置は類似していた。その中で一方の学校は、現位置に留まりキャンパスを再開発することを選択したのに対し、もう一方の学校は、現位置を放棄し郊外に新たにキャンパスを求める 것을選択した。この決断の違いは、その後それぞれの学校の展開に大きな影響を及ぼしたはずだが、その検討は今後に譲りたい。

郊外への移転のためには巨額の資金が必要であったが、こうした状況を知人である関西学院高等商業学部教授菊池七郎から聞いた実業家河鰐節は、武庫郡甲東村付近に広大な敷地を物色するとともに、阪神急行電鉄専務小林一三と交渉して原田校地の買い取りと移転敷地の提供などを承認させた。

結局、関西学院は母教会からの援助をあきらめ、当時この地域での開発を積極的に展開していた鉄道会社に多くの手を頼ることにしたのである。小林は関西学院の卒業生でもなく、それまで特に深い関係も持っていないかぎりながら、沿線に学校を誘致することはイメージアップにつながるばかりでなく、安定的な乗客の増加を見込めるところから、鉄道会社にとってもうまみのある話であった。こうした手法は、住宅地や遊園地開発に較べて営業費をかけずに一定の乗客を見込めるところから、

東京で五島慶太が本格的に展開するなど、都市の郊外への展開が進行していたこの時期に広く見られたものであった。

とはいえて、上ヶ原への移転がすんなり決まったわけではない。明治

以来拠点を構え、中央講堂など竣工後わずか数年しかたってない建物が建ち並んでいる原田を放棄することは相当思い切った決断であった。また、大学昇格等の問題を考慮すると移転せざるを得ないとしても、すでに市街地化が進んでいた神戸市内の原田に比べて、上ヶ原はまだ開発が始まつばかりの郊外であり、移転には慎重な意見が出ていた。また、移転候補地も当初から上ヶ原が所与の前提であつたわけではなく、西は明石から東は京都付近まで多くの候補地が挙がった。

特に神戸市街地に近い六甲台は、最後まで有力な候補として検討されていた。こうした論争に決着をつける上で大きな役割を実質的に果たしたのが六甲台では原田の旧校地を購入する意思がないとした小林一三の意向であった。

すでに神戸の市街地に近づき、阪神電鉄などライバル路線との競合もある六甲台とは異なり、当時路線を開通させたばかりで、積極的に開発を展開していた今津線沿線の上ヶ原のはうが小林にとってより魅力があったということは想像に難くない。

結局、関西学院は原田校地を売却し、小林から寄附された上ヶ原の校地に全面的に移転した。その際、原田時代から多くの関西学院関係の建物設計を手がけてきたヴォーリズ事務所が、上ヶ原校地の全体計画および建物の設計を担当した。

この時、関西学院は五五万円で新校地七万坪を阪急電鉄から購入したが、同時に三三〇万円で原田旧校地を阪急電鉄に譲渡しているので、多額の差益を得たことになる。これをもとにヴォーリズによる全体計画に基づくキャンパスを整備し、一九三三年に大学昇格を果たしたの

である。

49 Berry to North Sept. 25, 1923 "Missionary files: Methodist Church, 1912-1949" ibi

50 Berry to North Sept. 26-1923 AA025-6-2 "Missionary files: Methodist Church, 1912-1946" ibid

51 "Executive Committee Board of Managers, Aoyama Gakuin" AA 022: 3-1

52 Berry to North, Oct. 16 1925 "震災復興計画" ⑩ Dr.North宛 Dr.Berry の書簡』(AA 025-12-2)

53 Tomingaga to Berry June 19 1924, 『基督教新報員の地震文書』(AA 073-7)

54 前掲『神学院新築見積その他関係文書』。なお、American Architectural & Engineering ザ・ハーベイのトモトを去ったレーヤンズがアメリカ人建築家スラックと共に始めた設計事務所だが、約一年後スラックが同事務所を退職した後も、レーヤンズは一九一四年七月までこの事務所を続けていた。

55 「復興建築余聞」『青山学報』一九一四年一一月一五日

56 青山からみる会編『青山女子学院史』(青山からみる会 一九七〇年) 四八頁。

57 『大正十四年 青山学院校舎建築委員会記録』(AA 073-6-2)

58 「青山学院校舎落成式」『青山学報』四九号 一九一六年

59 ノーセンズは聖路加国際病院の設計についても建築様式をめぐる対立から途中で手を引いているが、青山学院の建築をめぐる経緯は不明である。

60 ノーメリハ・ノーメハニ・ノーメハニ (鹿島研究所出版部 一九七〇年) 七七頁。

61 前掲『青山からみる会記録』十二月頃⁶²回転。